

名古屋なんでも調査団：名古屋の地図 水 調査！

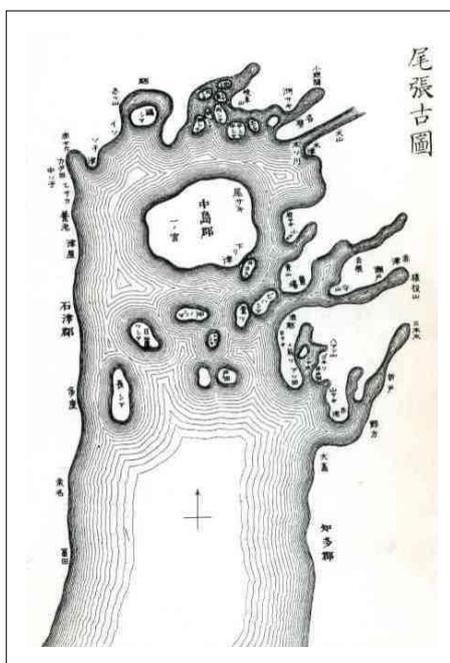
場所

鶴舞中央図書館
第二集会室

尾張古図と浪越伝説

期間

2011年11月12日(土)
～2011年11月13日(日)



『尾張名所圖繪』の「尾張古圖」

一説には養老元年（717年、養老年間とも）のものといわれる**尾張古図**をご存知でしょうか。はじめてこの古図を見た方は、ちょっとドキッとするかもしれません。尾張古図には現在の濃尾平野にあたる部分が描かれていますが、その濃尾平野の大部分が海中に没して「中島郡」や「津島」、「比ハシマ」など、地名に“島”とつく地域などがわずかに島として海面から顔を出しているように描かれています。

例えば、尾張の90箇所の名所を銅版画で描いた明治時代のガイドブックともいえる『尾張名所圖繪』（宮戸松齋／著 明治23年）の巻頭にある「尾張古圖」もその写しの一つと考えられていますが、やはり濃尾平野の大部分が海湾として描かれ、現在の名古屋辺りには「浪越」、「アツ田」、「ゴキソ」、「ハマン山」などの地名が見えます。

津波やゲリラ豪雨などの水害に対する関心が高まっていますが、私たちの住む名古屋の地形がどうなっているか考える上で尾張古図はちょっと気になる存在ではないでしょうか。そこで、

図書館フェスティバルを記念して、**名古屋なんでも調査団**が尾張古図について鶴舞中央図書館の資料を使って調査を行いましたので、調査の様子も交えてご紹介します。ただし、名古屋なんでも調査団は本を探す専門集団ではありませんが、残念ながら本に書かれている内容の方の専門家ではなく、古文書も読めません。したがって、歴史や地理の研究者の目からみたら不十分な点や誤りがあるかもしれませんが、あしからずご了承ください。

調査にあたってまずは『尾張名所圖繪』の「尾張古圖」以外にも何か尾張古図について書いてある資料がないか探すために、名古屋市図書館OPAC（資料検索）で「尾張古図」と入力して検索してみますが、残念ながら「該当する書誌がありません。」と表示されてしまいました。こんなときには図書館の**ほんシェルジュ**（司書）に声をかけていただければよいのですが、どんな資料を調べたらよいのかその手がかりを得たいときには図書館の**ほんシェルジュ**（司書）もインターネットを活用することがあります。



そこで、試しにインターネットで尾張古図を調べてみると、すぐに多すぎるほどの情報が集まりました。そこから調査に役立つような情報を要約すると、①尾張古図は猿投神社あるいは玉井神社に伝わるものである、②尾張古図というのは総称で異なるものがいくつかある。（「写し」という形で複製が作られて伝わったと考えられますが、その過程で地名や島などが加筆・省略されたためでしょうか）、③偽図という説もある、とのことです。

インターネットの情報は玉石混交でそれぞれの情報をどこまで信用してよいのか判断が難しいですが、このような情報を頭の片隅において、裏づけの意味でも改めて鶴舞中央図書館の蔵書を調べて見ます。インターネットの情報で出典となる資料について書かれているものがありましたので、それらをまず確認し、そこから芋づる式に資料を調べていきます。また、『**名古屋市史資料地図集**』（『名古屋市史』編纂のために集められた一枚ものの地図や絵図を縮刷して一覧できるようにした地図帳）や『**鶴舞中央図書館所蔵地図目録（名古屋市域）**』（鶴舞中央図書館で閲覧できる名古屋市域の一枚ものの地図や本の付録の地図などを年代順まとめたもの）、その他の古図が載っているような資料にあたりをつけて調べてみます。

調査の結果、鶴舞中央図書館の蔵書の中から次の7種類の尾張古図が見つかりました。網羅的な調査ではありませんので、もしかしたらもっとあるかもしれません。

A. 「尾州往古之地図」（市 20-188 明治 19 年?）

B. 『尾張名所圖繪』（宮戸末齊／著 明治 23 年）「尾張古図」

C. 『金城温古録』（市 13-240 明治 42 年成立）「尾張大古之図」

奥村得義識があります。安政 5 年（1858）までに成立した得義草稿本（東洋文庫本）の清書本と考えられています。『名古屋叢書続編 第 13 巻 金城温古録』（名古屋市教育委員会 1965 年）や『百年むかしの名古屋』（名古屋地下鉄振興 1989 年）にもこの図が掲載されています。

D. 『尾張の方言』（加賀紫水／著 土俗趣味社 1931 年）「尾張太古図」

『郷土史 234 珍』（森徳一郎／著 一宮史談会 1967 年）の表紙に使用されているものや『日本のおへそ』（山本周二／編 中部日本教育文化会 1968 年）にあるものも同じ図だと思われます。

E. 『桑名市史 本編』（近藤奎／編 桑名市教育委員会 1959 年）「伊勢湾奥部の古図」

F. 『長島町誌 上巻』（伊藤重信／著 長島町教育委員会 1974 年）「往古の尾張古図」

『古地図研究』（日本地図資料協会／編 国際地学協会 1978 年）に E と F の略図が引用されています。

G. 『東春日井郡誌』（東春日井郡役所 大正 12 年）「尾張太古之図」

“文化十一年（1814）春日井郡玉井之神社修覆ノ際發見シタルモノヨリ縮寫シ海中点線ヲ以テ劃シタルハ現在ノ尾張國ナリ”とあります。

これらの地図を比べてみると（別表「尾張古図の比較」参照）、尾張古図には2つの系統があることがわかります。一つは**猿投神社**から出たとされているものと、もう一つは**玉井神社**から出たとされているものです。猿投神社のものは「中島郡」が大きな島として描かれているのに対して、玉井神社のものは「中島郡」部分が大きな島ではないこと、知多地域が半島として描かれている点に特徴があるようです。（ただし、後述のとおり阿部直輔は『明治隨筆』で両者を同じ図だとしています。もともとは同じ図だったものが後の加筆・省略により上記のような違いが生じた可能性もあります。）

尾張古図が見たいというご相談であれば、通常はここで調査終了となります。しかし、今回の名古屋なんでも調査団ではさらに尾張古図が**偽図**であるという噂の真相と、尾張古図に「名古屋」の地名の由来の一つとされる「**浪越**」の文字がある点に注目して、名古屋の浪越伝説の解明に挑戦します。

それでは、まず基本に戻って名古屋市図書館作成の“なごやりさ〜ち”（名古屋に関するテーマを中心に、名古屋市図書館の資料を活用した調べ方についてまとめたもの）シリーズの「尾張の地誌・地名を調べる」で紹介されている資料を調査してみます。

歴史地理学の基礎資料としてとりわけ古代の地名について調べるときにまず参照すべきものに『大日本地名辞書』（明治33年に第1冊の初版を刊行、明治40年に全11冊が完結）があります。著者の吉田東伍は「尾張国 中島郡」の項目で**尾張古図**（“猿投宮の古図”）は“**近人の贋作**”であると断じていることがわかりました。（『大日本地名辞書』の序文の中に著者吉田東伍の識見を高く評価した志賀重昂の長い序文がありますが、その地図に関する識見の例として尾張古図がとりあげられています。→『地名の巨人吉田東伍 大日本地名辞書の誕生』（千田稔／著 角川書店 2003年）に詳しいです。）また、農商務省地質調査所の地質説明書などのように地学や土木治水の専門家が尾張古図を引用することが当時の通例となっていたことを批判して、“今日猶かかる贋図に拠り、治水を論じ変遷を説く人あるは、如何にしても奇怪なり”とも述べています。

そして、さらに調査を進めると尾張古図は江戸時代には既に偽物であると考えられていたことが判明しました。その根拠となる記述をご紹介します。

- ・『尾張国地名考』（津田正生／著 東海地方史学協会 1986年 文化13年（1816）成立）
“尾張の國の古圖一枚是亦近年玉井明神の社内より出といふ此圖は名古屋七間町三丁目指物為文左衛門が憶説をもて圖引せしものにて取がたしと近藤利昌もいへり”
- ・『諸家雑談』（細野要斎／著 嘉永5年（1852）の記述）→『名古屋叢書三編 第12巻』所収
“世にある玉の井の祠より出たと云尾張の古図は、蓋し偽物なり。古名にはよく熟し、古図には甚暗き人の作りしなるべしと、或人云。”
- ・『明治隨筆』（阿部直輔／著）→「名古屋地誌資料」（市13-45）所収
尾張古図について考証しています。『尾張地名考』を引用した部分に“直輔云、世二古圖ト稱スルモノニアリ。一二ハ猿投神庫ニ出ルト云者アリ。共二同圖也。”と記しています。

これらの記述から遅くとも文化13年（1816）には**玉井神社**の尾張古図が存在していたことがわかりますが、その出所について近藤利昌が名古屋七間町三丁目の指物師（家具大工）の文左衛門が憶説で書いたものであることを明らかにしています。この近藤利昌については『尾張国地名考』の著者の津田正生が“藤原の利昌は其職官吏にして殊更に地理を好み御領分之内至らぬ隅もなく（中略）眼目を配りて搜るに曉智こと予が及ばざる所なり予がしらぬ所は利昌に聞てこれを補ひぬ”と述べていることから、二人は同時代の人物であることがわかります。

それでは、**猿投神社**に伝わったとされる尾張古図はどうでしょうか。『猿投神社の総合研究 下』（太田正弘／著 1993年）によると“今、社藏のものには、「此圖、三州猿投之宮中ヨリ出」とあつて、第三者が社藏のものを寫した躰のものである。その「原本」は初めからなかつたものか、或ひは失われたものか定かでない。”とあります。そして、“この圖は「養老年間の圖」とか「養老元年の圖」とも云はれてゐるが、その養老とする根據は不詳である”とあり、やはり偽図という噂を打ち消すことは難しそうです。

以上のことから尾張古図は養老の頃から伝わったものとは考えにくく、しかも吉田東伍や阿部直輔が考証しているように他の古記録の記述からすると養老頃の濃尾平野は尾張古図のような地形ではなかったと考えられるため、後世の人が特に養老の頃を選んでその地形を想像・考証して描いたものであるとも言いがたいということになります。

それでは、視点を変えて尾張古図に描かれている地形にどのような意味があるのか整理してみましよう。尾張古図に描かれている地形は、①現在の濃尾平野の辺りに人が住みはじめた太古の大昔の地形をあらわしている（縄文海進の地形に似ているという人もいます。なお、縄文海進の図は『名古屋地盤図』（コロナ社 1969年）などにあります。）、②大規模な水害があった場合を想定してその被害予想をあらわしている（ハザードマップ）、③記録が残る以前の大昔の水害の被害状況をあらわしている（被害状況の想像図）の3つの可能性があるのではないのでしょうか。②と③は水害のための主題図ということになりますが、②の場合にはそのような大規模な水害が過去におこっておらず、③の場合には大規模な水害が実際に過去におこったということになります。

尾張古図をハザードマップと考えるのは飛躍しすぎなのかもしれませんが、名古屋城の百科事典である『金城温古録』に収められている「尾張大古之図」の**奥村得義の識**を読むとあながち的外れではないように思えます。

“以前見し一図には、猿投の神祠に出るの詞書有り、不審なり、思ふに好古の人、開闢を談するに、此図をなして後世を指南せしものゝ伝はれるならんか。併、再今、又古を談するに、空手にて言んより、仮りに是あらば、当たらずとも遠からずして便り有り、因て拾ひ置く。得義謹識”

奥村得義は尾張古図が作られた理由について“開闢を談する”こと、さらに“後世を指南”することにあつたのではないかという見解を示していますが、開闢とは歴史のはじまり、すなわち濃尾平野の辺りに人が住みはじめた頃のこと、尾張古図はその太古の大昔を議論するために作られ（→①）、さらに大昔には濃尾平野の大部分は海であったのだから水害の際には充分に気をつけるようにと後世に教えるためのもの（→②）だったと解釈することもできるのではないのでしょうか。

尾張古図が③の被害状況の想像図であった可能性についてはどうでしょうか。例えば、『大日本地名辞書』の志賀重昂の長い序文の中で尾張古図ともに言及されている越後の寛治6年（1092）古国図というものがあります。この古図について“世俗に伝わる寛治の古図は、中世に洪水によって水があふれた状態を絵図にしたもので（中略）『扶桑略記』の「寛治六年八月三日、大風諸国洪水、高潮之間、民煙田畠多以成海」の際の絵図ではないか”（前述の『地名の巨人吉田東伍』の現代語訳からの引用）とする説について書かれています。（ただし、この説について吉田東伍は“附会ノ巧言、弁護ニスギズ”と述べています。）改めて『扶桑略記』（『国史大系 第12巻 新訂増補』（吉川弘文館 1999年）所収）を確認してみると、前述の引用部分に続けて伊勢神宮の被害の記述がありました。したがって、寛治6年8月3日の諸国に洪水をもたらした“大風”は濃尾平野にも大きな影響を及ぼした可能性があります。もちろん寛治6年の大風と尾張古図をすぐに結びつけることはできませんが、尾張古図が“洪水によって水があふれた状態を絵図にしたもの”である可能性も完全には否定できません。

“八月三日甲寅、大風、諸國洪水。高潮之間、民煙田畠多以成海。百姓死亡、不可稱計。伊勢太神宮寶殿一宇、并四面廊等、皆為大風顛倒。”

実はこの可能性を感じさせる発見が天保9年（1838）閏4月3日に**海東郡の諸桑村**でありました。この発見はいち早く瓦版として報じられ、その後『尾張名所図会 前編卷之七』や「想山著聞奇集」（『日本庶民生活史料集成 第16巻』（三一書房 1970年）所収）でも紹介されるほどのビッグニュースでした。（→『佐織町史 通史編』（佐織町 1989年）に詳しいです。）それは、諸桑村の満成寺裏から長さ24メートル余、幅約2.2メートルというとても大きな**古船**（丸木舟）が発掘されたという事件でした。『尾張名所図会』によると、船の中からは“古瓦古銭その余異形の珍器”が、付近からは“木仏像”も発掘されました。そして、なぜこのような古船が地中に埋まっていたのか、その理由について大昔はこの辺りは海でそこに船が沈んだものか、あるいは、大昔はこの辺りまで川で川船が沈んでいつのまにか埋まったものではないかと述べられています。



「諸桑村にて古船を掘出だす図」

“当村は式内諸餼の神社もありて千年に及ぶ旧地なれば、その已前いまだこの辺の海にてありし時よりしづみし船ならんか。または隣村古川村はもと川筋なりしを埋めて今の村とせしよしなれば、この辺までも彼の川筋にて、そこにありし川船のいつしか埋れありしにもやあらん”

また、藩撰の地誌である『尾張志』（深田正韶／撰 天保14年（1843）成立）の諸桑村の記述では“地震津波”の可能性についても言及されています。

“入江などにかゝりし船の地震津波等の變に埋れし物か珍らしき事なり”

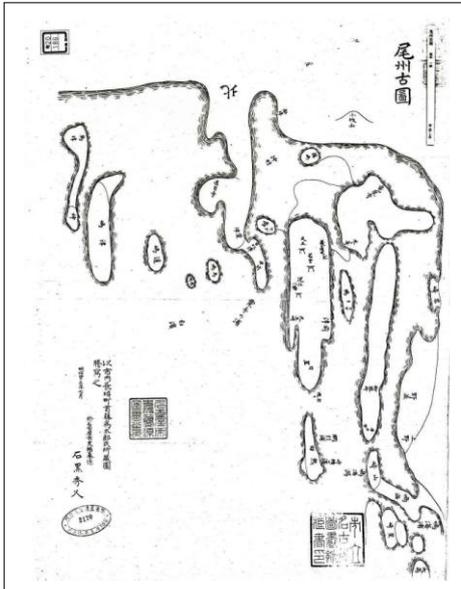
この諸桑村の発見により、近藤利昌や津田正生による偽図説が有力となっていた尾張古図に対する見方にも変化が生じたようです。その例が前述の『尾張志』の中島郡の記述にあらわれています。千年以上の歴史のある諸桑村の地中から大きな古船が発掘されたことを考えると、尾張古図は全くのでたらめとは言いがたいのではないかと述べられています。

“參河國猿投神社の所藏なりしといへる尾張國古圖に南の海の中に一箇の島をかきて中島としるせりと古き世にハさもありしなるへし（中略）尾張の古圖もひたふるに偽作ともいひかたきにや近年諸桑村の地中より古代の船の大きやかなるを堀出しつるにても考ふへし”

なお、近藤利昌や津田正生が偽図としたのは玉井神社のもので、猿投神社のものについての言及している資料は確認できませんでした。状況証拠から考えると、諸桑村の古船の発見により尾張古図が再び見直されることとなったときに、名古屋七間町三丁目の指物師文左衛門が作ったことが明らかにされている玉井神社のものでは具合が悪いため、猿投神社のもののみが注目されることとなり、その後は猿投神社より出たとされた尾張古図が流布することになったのではないのでしょうか。鶴舞中央図書館の蔵書の中で見つかった尾張古図も猿投神社のものが多かった理由もそのあたりにあるかもしれません。

尾張古図が偽図であるという噂の真相について名古屋なんでも調査団の見解としては、養老元年又は養老年間のものであるという根拠は乏しく、玉井神社又は猿投神社より出たという確証もないということから偽図とみなされてもしかたがないと言えますが、そこに描かれた地形については全くのでたらめとは言い切ることはできないということになります。

さて、噂の真相がどうであれ尾張古図が名古屋の地形や水害について考える上でちょっと気になる存在であることにかわりありませんが、『名古屋市史資料地図集』で見つけた「尾州古圖」はさらに気になる存在と言えます。尾張古図には濃尾平野が描かれていますが、尾州古圖には名古屋近郊のみが描かれており、地理的には尾張古図の部分図という位置関係になります。尾張古図と尾州古圖



「尾州古図」(市 20-186)

古圖はともに何らかの水害をイメージさせますが、よくよく見てみると両者では大きく異なる点があります。尾張古図では浪越(名古屋)から熱田にかけて陸続きに描かれていますが、尾州古圖では名古屋部分と熱田部分が「古渡」辺りで寸断されていてそれぞれが島のように描かれています。つまり名古屋部分にのみ注目すると、尾州古圖は尾張古図に比べてさらに水位が上昇した地図のようにも思えます。また、尾州古圖には地名だけでなく名古屋部分に「天王」・「若宮」・「藏王権現」・「泥江八幡」の文字と鳥居の絵が描かれているという特徴があります。この尾州古圖は名古屋市史編纂係による明治43年7月の写しですが、その原図がいつ頃作られたものでどのような由来のものなのかとても気になりますが、残念ながら詳しいことはわかっていません。

さて、次は**浪越伝説**の解明です。「名古屋」という地名の由来については諸説ありますが、一説に“古へは島山にして海近ければ、浪高きときは、山の頂をも浪の越ゆる事度々なりし故に、浪越（なごや）と呼ぶ”（『名古屋市史 地理編』）とあります。また、尾張古図にも名古屋部分に「浪越」の文字が示されています。（ただし、C.『金城温古録』の系統のものには浪越など名古屋に相当する地名の文字はありません。）

「浪越」という文字自体が水害を連想させますが、名古屋近郊について尾張古図のような地形であれば確かに『名古屋市史』で述べられている“古へは島山にして海近ければ”という記述と一致します。そうであるならば“浪高きときは、山の頂をも浪の越ゆる事度々なり”ということも十分にありえたのではないでいいでしょうか。

ここでご覧いただきたい絵図があります。それは高力種信（猿猴庵）著の『尾張名陽図会 巻之五』にある「**浪越舊跡**」です。この絵図には海からの波が山を乗り越えて滝のように流れる様子と、その水が流れこんだ池で布をさらしている人たちの様子が描かれているのですが、なんと、この絵図の説明書きには名古屋の地名の由来のことだけでなく、浪越の跡の場所についても書かれています。



「浪越舊跡」

“初めの巻に出だせし名古屋という地名の条にあらはせしごとく、名府出来ざる以前大古のいにしへは、東北は大海の由。その波の高くあふれし時は、山の頂を浪の越えし故浪越山と呼ぶ。その後名古屋と書きうつり替りて名古屋の文字とすといふ。その浪越の跡は今の建中寺前なる由。ここを越えし波下へ流れて落ち留まりたるが大きな池となりて、布をさらせし由、今の布が池これなり。布さらし池を略して呼ぶ名なり。その布問屋の家は建中寺水道先の町にて、その跡有りとかや。”（『日本名所風俗図会 6』（角川書店 1984年）の活字翻刻より引用）

高力種信によれば、名古屋には太古の大昔に「**浪越山**」と呼ばれる山があり、その山を越えて流れこんだ水が留まった場所が建中寺の前の「**布が池**」であるということです。

まずは布が池の場所を調べてみましょう。再び名古屋市図書館作成の“なごやりさ〜ち”シリーズの「尾張の地誌・地名を調べる」で紹介されている資料を調査してみます。地名の五十音で調べられる資料としては『角川日本地名大辞典 23 愛知県』（角川書店 1989年）があります。同書によると明治4年～昭和56年まで「布池町」という町名があり、“町名は当地にあった布ヶ池に由来する”とのことで、現在の葵1～3丁目・代官町・筒井1～3丁目にあたることがわかりました。布ヶ池の変遷についても次のように書かれています。

“布ヶ池は往古広大な池で、御下屋敷添地の頃には泉水ともなったが、延享年間頃北西から次第に埋め立てられ田となり、寛政年間には南東の隅に池が少し残っていた（蓬州旧勝録）。のちすべて埋め立てられ、田地に武家屋敷が増えた。その間を東西に通る道筋を新道と称している。（尾府全図）”

また、定番資料である『日本歴史地名大系 第23巻 愛知県』（平凡社 1981年）や『名古屋市史 地理編』（名古屋市／編 愛知県郷土資料刊行会 1980年 大正5年刊の復刻版）も確認してみるとほぼ同様の内容の記述があり、江戸末期にわずかに残っていた池の位置についてはこれらの資料にもう少し詳しく書かれていました。ただ、ここまでの調査で布ヶ池の場所については特定できたものの、布ヶ池と浪越伝説との関係について言及しているのは『尾張名陽図会』のみで、残念ながら他に手がかりは得られませんでした。

“江戸時代末期には板長屋筋の西裏境、竹藪の蔭に池の形が残っていた（蓬州旧勝録、金鱗九十九之塵）。

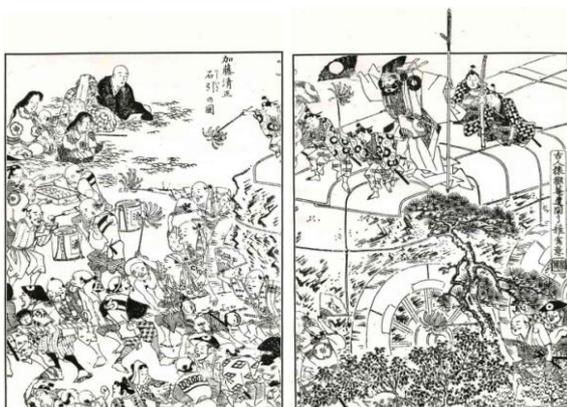
現在は跡形もなく市街地となっている。”（『日本歴史地名大系 第23巻 愛知県』）

“布ヶ池は東區布ヶ池町石神小祠の裏に在りて、その跡田となれり、第一圖第一號に御添地池と載せたるもの是なり”（『名古屋市史 地理編』）

気持ちを切り替えて、**浪越山**について調べてみます。浪越＝名古屋と考えると、「浪越山」以外にも「那（名）古屋山」や「那（名）古野山」と表記されているものも調査対象となります。まず調べる資料はやはり定番の『角川日本地名大辞典 23 愛知県』・『日本歴史地名大系 第23巻 愛知県』・『名古屋市史 地理編』です。ところが、これらの資料の見出し語の中には浪越山に相当する用語はみあたりませんでした。

こんなときは初心に戻って調査の出発点である『尾張名陽図会』を再び調べて見ましょう。そこで『尾張名陽図会』や『尾張名所図会』の活字翻刻がある前述の『日本名所風俗図会 6』を確認してみると、索引に「那（名）古野山」の用語があり、二箇所に関係する記述があることがわかりました。一つは『尾張名所図会 前編巻之一』にそのままずばり「那古野山」の項目がありました。那古野山の説明として“清寿院の後園にありて（中略）古色隠々たる雅地なれば、当年の面影その儘見るに足る小山なり”とあります。しかし、清寿院は大須観音の近くにあった寺院でしかも“小山”と書かれていますので、位置的にも大きさ的にも浪越伝説と結びつけるのは無理がありそうです。もう一つは『尾張名陽図会 巻之一』の「**名陽の市井碁盤割**」の項目に次のような記述がありました。

“むかしは名古屋山とて深山なり。峯に登り谷に下る道もさがしく人家も稀なる所なりしを、慶長年中清洲より御遷府の砌、御城御普請の御手伝として西国の諸大名衆その功を励る中にも、加藤主計頭清正は、かの名古屋山のけはしき深林に入りて、山をけづり谷を埋みて今のごとき高低もなき平均の地とはなさる。”



『尾張名所図会』の「加藤清正石引の図」



『尾張名陽図会』の「加藤肥州石引舊話」

名古屋城下の碁盤割の辺りがかつては名古屋山と呼ばれた深山で、興味深いことにあの加藤清正が名古屋開府にあたって名古屋山の山谷を均して平地にしたとのこと。そういえば『尾張名所図会』には有名な「加藤清正石引の図」という絵図がありました。（『尾張名陽図会』にはそのお手本と考えられる「加藤肥州石引舊話」もあります。）

あの加藤清正が名古屋山と関係しているとは思いませんでしたが、さらに「名古屋峠跡」という項目もあり次のような記述もありました。（ただし、「名古屋峠跡」や後述の「名古屋山東出口古戦場」については『日本名所風俗図会 6』の索引の「な」からは引けませんでした。調査にあたってはこのようなこともあるので注意が必要です。）

“今の札之辻の辺、むかし名古屋山の峠とて高き岑なりしを、御城下の町となる時、加藤清正肥後国の入夫を集めて岑をけづり、その土を用ひて谷々を埋みて平地となす。世の人その功をほめて、その頃の里童のはやりうたに「音に聞こえし名古屋の山をふみやならした肥後の衆が」とうたひしとなり。”

また、『尾張名陽図会 巻之五』には「名古屋山東出口古戦場」の絵図があり、その後ろの項目には次のような記述もありました。

“名古屋山へ東よりの入口なれば、名古屋山東の入口を略語に呼んで山口といふ由。さてこの山口は、店の名にても村の名にもあらずとかや。ただ所の字なるか。この山口の地は、古井村の地も入りたり。建中寺の鐘の銘には「古井村建中寺」と有り。さればこの辺は、古井の内なれども惣じて山口とよぶ。法花寺町より東は古井村なりとぞ。”



どうやら「山口」というのがキーワードのようです。そこで改めて定番の資料を調べてみると名古屋山に関する記述がいくつか見つかりました。（ちなみに資料調査において、ほんシェルジュ（司書）の最大の仕事は適切なキーワードを見つけることだといっても過言ではありません。）

“山口は往古名古屋山の東の入口にあたることにより、江戸期片端以東の総称に用いられた（金隣九十九之塵）。”（『角川日本地名大辞典 23 愛知県』の山口町〈名古屋市東区〉の項目）

“慶長十五年（1610）の名古屋築城後、西部の台地上は数年のうちに城下東辺の武家屋敷街に変わり、その東部から南部にかけて五〇余の寺院が集中し、建中寺・相応寺・高岳院など、徳川家に関係の深い大寺院も含まれ、武家屋敷や寺院のなどの間に町屋が介在した。（中略）

これらの地域は、古来、山口と総称され、この時代には東山口・西山口に分かれ、その一角（白壁町・撞木町・主税町辺り）に山吹の名所山吹谷があった。”（『日本歴史地名大系 第23巻 愛知県』の東区の記述）

“山吹谷 片端の東坂下なる鳥屋筋の辺は昔の那古野山の谷合にて、暮春の比は遊蕩の諸人、酒さかなを携へ来り山吹の花を愛でつつ歌ひ舞ひなどせし地なるが、いつしか武家の宅地となりて、今もなほ山吹のところどころに残れるは昔のおもかげぞかし”（『尾張名所図会 巻之二』）



「山吹谷」

浪越伝説に関するここまでの調査結果を整理すると、①現在の名古屋城下の碁盤割の辺りはかつては名古屋山と呼ばれる深山でその東側の入口が片端以東の地域で山口と総称されていた（現在の東区の4分の3にあたる地域）、②名古屋山の東北が海であった大昔に名古屋山を越える高波があり、そのときの水がたまって広大な布ヶ池ができた、③名古屋山は名古屋開府にあたって加藤清正らの土木工事により平地になった、④広大な布ヶ池は延享年間頃に北西から次第に埋め立てられ、寛政年間にはわずかに池が残っていたが現在は跡形もなくなっている、ということになります。

ここまでの調査結果は出発点となった高力種信著の『尾張名陽図会』にある「浪越舊跡」の内容と矛盾しておらず、高力種信の説に疑念をいだかせるような記述はありませんでした。ところが尾張古図に肯定的なはずの『尾張志』の「布ヶ池舊跡」の項目になんと高力種信の「浪越」の説を“信しかたく證としかたし”とする記述がありました。

“御下屋敷の東の方御添地の武士屋敷邊にありむかしは布をさらしゝ程の大池なりしか今はうつもれて其名のみ残りり往古海潮の山を越て此邊に溢れ池のことくなりし故里の名も浪越と号けしよし高力種信かあらはしゝものに記したれと信しかたく證としかたし”

今回の名古屋なんでも調査団の浪越伝説の解明においては高力種信の説を重要な手がかりだと考えて調査を進めていたのですが、ここに来てその重要な手がかりを信じてよいのかという迷いが生じることとなりました。他に手がかりも見つからず残念ながら浪越伝説の調査はここまでかと思いはじめた頃、偶然にも新たな手がかりを得ることができました。その手がかりとは、たまたま閲覧を終えて返本された『アトラス水害地形分類図』（大矢雅彦／著 早稲田大学出版部 1993年）という資料でした。

水害地形分類図は“洪水を受ける地域の地形を重点的に分類し、その分類された地形要素及びその組合せの特色から、洪水の状態を推定する図”とのことです。そして、最初の水害地形分類図である「**木曾川流域濃尾平野水害地形分類図**」が作られてから3年後、“伊勢湾台風による高潮・洪水の浸水範囲が地図のデルタの範囲とピタリと一致したことでその価値を学会だけでなく社会に認められ”今日では「土地条件図」の名で利用されていると書かれています。

この「木曾川流域濃尾平野水害地形分類図」の名古屋辺りに注目すると熱田台地と呼ばれる部分がゾウの鼻のように見えます。この図を見て、過去に「名古屋市およびその周辺の海岸線が大昔（縄文時代など）どうなっていたかわかる地図がみたい。」というご相談を受けたことがあることを思い出しました。この質問に対してどのように回答したかは**レファ協**（国立国会図書館レファレンス協同データベース）にレファレンス事例としてデータを登録・提供しているため、名古屋市図書館ホームページの「調べ物案内」>「レファレンス事例集」からキーワードで検索して閲覧することができます。その中で紹介している『名古屋の大地とその生い立ち』（村松憲一／著 スパイススタッフ 2007年）という資料にやはりゾウの鼻のような地図があるのですが、このゾウの前足？の下付近の“笠寺観音のある地域は離れ島”のようになっていて、この離れ島は昔は“**松巨嶋**（まつこじま）”と呼ばれていたことがわかりました。この松巨嶋について調べれば、何か浪越伝説につながるものがみつかるかもしれません。

松巨嶋について調べてみると『名古屋市史 地理編』や『日本歴史地名大系 第23巻 愛知県』に項目があり、『塩尻』に「尾張の国の名所」として“松炬嶋”と記されていることのほか、「尾張徇行記」の山崎村の項目に次のような興味深い記述があることがわかりました。

“此山崎・戸部・桜・笠寺・本地・南野・牛毛・荒井ハヶ村星崎ノ庄二属シ、新屋敷村ハ山田ノ庄二属シ、此九ヶ村ハ地脈ツゞキ、往古入海四方ニ縈回シテ一曲輪ノ所ナル故、総名ヲ松巨島ト云、一面地高シ、往昔喚続浜潮盈レハ鎌倉海道ノ方上野ヘカカルト云”

また、表面に「松巨嶋」、背面に「明和丙戌歳五月吉辰願主三宅徳左衛門年定」と刻んだ手洗鉢が呼続町の熊野三社の境内にあるということもわかりました。(→『松巨嶋』(久野園吉/著 1972年)に詳しいです。)明和丙戌歳=明和3年(1766)ですが、なぜこの年月を刻んだ手洗鉢が作られることになったのでしょうか。その理由として明和3年5月からそれほど遠くない過去に往古の松巨嶋の伝承(往古入海四方ニ縈回シテ一曲輪ノ所)を思い出させるような大規模な水害があったと考えるのが自然なのではないでしょうか。

そこで『愛知県の気象』(名古屋地方気象台/編集 気象協会名古屋支部 1962年)の災害年表を調べてみると、明和2年8月(1765年9月)に「大雨」があり、“2日、3日、7日の大雨に依りて熱田、名古屋の市中一面に水に浸り、本町筋の町屋も床板を撤するに至れり、而して東は奥田町より浜街道に至り、西は佐屋街道より津島に至る間一時皆水中に没す。”(首藤柳左衛門日記)という記事がありました。この大雨と手洗鉢を直接結びつける証拠はみつかりませんが、少なくとも明和3年頃には伝承や過去の経験を元にこの地域の地形について考え、さらに水害の被害(予想)について将来に伝えようという意識があったと言えます。

改めて「木曾川流域濃尾平野水害地形分類図」や国土地理院の“地形の特徴を知り防災に役立てる”ための主題図のいくつかを眺めてみると、それらにはっきりと「松巨嶋」らしき地形や熱田台地の北側が低くなっている様子を読み取ることができます。推測になりますが、現在よりも海面が高く四方を海に囲まれた松巨嶋があったとき、あるいは松巨嶋があらわれるような大規模な水害がおこったとき、そのときには高力種信のいう名古屋山を波が越える「浪越」もあったと考えてもおかしくはないのではないのでしょうか。皆さんはどう思いますか。

最後になりますが、今回の名古屋なんでも調査団の活動を通じて入手することとなった国土地理院の「1:75,000 地盤高図 濃尾平野(旧)」(1975年)や「1:50,000 地盤高図 濃尾平野(新)」(1990年)、「1:25,000 デジタル標高地形図 名古屋」(2006年)と「1:25,000 デジタル標高地形図 濃尾平野西部」(2008年)を並べたものと尾張古図を対比してご覧いただくと、さらに「尾張古図と浪越伝説」の展示をお楽しみいただけると思います。

この展示をきっかけに水害などの自然災害に対する意識が高まり、少しでも防災・減災につながることを願って名古屋なんでも調査団の報告を終わります。